豊田市民芸館だより

左　とくさ文蓋付飯茶碗
右　麦藁手蓋付飯茶碗
愛知県瀬戸

目　次

・「おいしい民窯－食のうつわ」展より…… 2頁
・柳家と本多家の食卓…… 3頁
・「アイヌの美しき手仕事」展を終えて…… 4頁
・民芸館と本多記念民芸の森の１年を振り返って… 5頁
・本多記念民芸の森から…… 6頁
・令和７年度展覧会のご案内…… 7頁
・民芸館からのお知らせ…… 8頁

第38号

「おいしい民窯－食のうつわ」展より

令和７年１月11日（土）～５月25日（日）の間、「おいしい民窯－食のうつわ」展を開催しています。「民窯（みんよう）」とは、日々の生活のなかで使う器や道具などを焼く窯、またはそのやきもの自体を指します。本展では愛知県の瀬戸焼をはじめ、当館が所蔵する日本全国の民窯の食にまつわるやきものを一堂に会します。民窯のうつわには用途に合わせて形作られた自然の造形美が宿っています。日本各地の民窯を訪ね歩くように、諸国の気候や風土が育んだやきものたちの素朴な美しさをご覧ください。

＊

今回は展示作品の中から、福島県会津本郷焼の鰊鉢（にしんばち）を紹介します。鰊鉢は福島県会津で冬の保存食として作られている身欠きニシンの山椒漬けのための鉢です。全体に茶色の飴釉（あめゆう）が施されており、飴釉は貫入（かんにゅう）（焼き上がった際にできるひび割れ）が他の釉薬に比べて少ないため、油が染みにくく水漏れもしづらい構造になっています。５枚の板によるシンプルな作りではありますが、見た目の美しさだけでなく、ニシンをおいしく漬けるための工夫も備わっている会津の風土が生んだやきものです。まさに「用の美」を体現した民窯のうつわといえるでしょう。

この鰊鉢が製作された宗像窯（むなかた）（福島県会津本郷）には、実際に柳宗悦や河井寛次郎らが訪問しています。宗像窯のある会津本郷焼の産地は、幕末の戊辰戦争、新島八重や白虎隊などで知られる会津若松市から車で30分程度の会津美里町にあります。東北最古のやきものの産地として、全盛期には100を超える窯元があったそうで、今でも13の窯元が多種多様なやきものを製作しています。この会津美里町の本郷エリア、閑静な住宅街の中に突然窯元の煙突が現れたり、登り窯を見学したり、通りかかった窯元で気に入ったやきものを購入したり…と歩いているだけでも寄り道する場所がたくさん見つけられます。当時と景観は異なるかもしれませんが、柳もこんな風にあちらこちらへ歩き回っていたのでしょうか。

福島県会津本郷焼　鰊鉢

実は本展のポスター写真、民芸館のとある場所を背景に使用しました。どこで撮られたものかお気づきでしょうか。答えは第１民芸館展示室の床です。当館の第１民芸館は、豊田市名誉市民であり古陶磁研究家の本多静雄（1898-1999）の尽力により東京・駒場にある日本民藝館が改築される際に、旧大広間と館長室を本多が譲り受けて豊田市に寄贈し、豊田市が整備して1983（昭和58）年に開館しました。柳宗悦を中心に設計された日本民藝館、現在は当館の第１民芸館展示室として使用している旧大広間もその一つです。床材に使用されている栃木県の大谷石は、日本民藝館の玄関や展示室、柳の邸宅（現在の日本民藝館西館）にある長屋門の屋根や外壁にも使用されています。柳は展示品がより美しく見えるようにと天然素材をふんだんに使用していますが、大谷石は特に好んで使用していた素材といえるでしょう。

今回は撮影日が展示替え期間に重なっていたため、大谷石の床を背景に使用することが叶いました。第１民芸館をご覧いただく際には、展示室そのものに目を向け、空間の美しさを楽しんでいただけますと幸いです。

（深田七海）

本展ポスターより

柳家と本多家の食卓

参考文献　『ご挨拶』柳宗悦　日本民藝協会編集・発行　平成16年
『青佳続譜（一）』本多静雄　平成7年

当館では５月25日（日）まで「おいしい民窯－食のうつわ」展を開催、展覧会場の第１民芸館ロビーでは、日本民藝館を設立した思想家・柳宗悦（1889-1961）の邸宅の食堂の様子を写真で紹介しています。また、第３民芸館では関連展示として、当館設立の立役者である豊田市名誉市民・本多静雄（1898-1999）の邸宅の食卓の様子を、写真と作品で展観しています。今回は、両者がどのような「食のうつわ」を生活に取り込んでいたのか、見ていきたいと思います。

旧柳邸食堂にて
昭和18年（1943）7月　写真提供：日本民藝館

左は柳邸での写真です。左から３番目が柳宗悦、その隣には、兼子夫人がイギリスの水差しを持って立っています。テーブルの上には河井寛次郎によるスリップウェアの皿、濱田庄司による土瓶や蓋物があり、土鍋の横には沖縄の皿が６枚積み重ねてあります。

旧柳邸は、写真に見られるような障子など、建具やしつらえに柳の美意識が反映された意匠となっています。食卓を彩るうつわにも河井や濱田の作品を中心に使用しており、「身自らもその美しさにあやかる暮しを致すやうにすべき」と望みました。

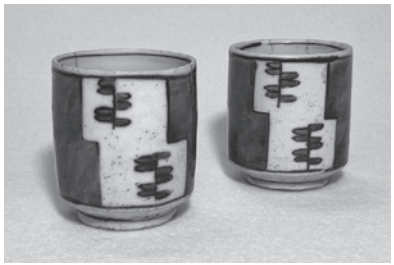
旧本多邸母屋にて
昭和30年（1955）4月

一方、上の写真３枚は最近の調査で見つかった資料で、本多邸（現・豊田市本多記念民芸の森）にかつて存在した母屋での食事の様子です。左に本多静雄、中央に美恵夫人が写っています。本多が設立した日本電話施設株式会社の壁掛けカレンダーより、昭和30年４月であることがわかりました。本多57歳の時です。また、中央の写真、箪笥の上の左端には、本多が前年に発見した猿投窯の灰釉尊式花瓶、本多の奥には染付の火鉢が見られます。テーブルの上には、河村喜太郎の作品「色絵松之図鉢」と「染付湯呑」があり、本多の前にだけは岡部嶺男の「絵志野筒湯呑」も置いてあります。

昭和30年といえば名古屋民藝協会が発足される前年ですが、本多は民藝という思想に共鳴はするものの、実生活では近くに住まう河村や岡部の作品を取り入れていたようです。特に河村の「色絵松之図鉢」は金継ぎが施されており、大切に使用されていたことがうかがえます。本多の著書『青佳続譜（一）』でも、晩年の本多が、茶碗は川喜田半泥子、海苔の皿は河村喜太郎、漬物の入った鉢は染付の民芸品、筒型の志野の湯呑は岡部嶺男といった作品を使って生活していることが書かれており、食のうつわの大部分には「作った人達の顔が後に見える」ものを愛用しました。

（岩間千秋）

色絵松之図鉢
河村喜太郎



染付湯呑
河村喜太郎

絵志野筒湯呑
岡部嶺男

「アイヌの美しき手仕事」展を終えて

昨年、豊田市民芸館では「アイヌの美しき手仕事」展を開催しました。本展は、2020年度に日本民藝館で開催された同名展覧会を再構成したものですが、昨年度当館と日本民藝館に寄贈された髙松静男コレクションもあわせて紹介した点が大きな特徴となりました。また、第３民芸館ギャラリーでは髙松コレクションの民具を中心とした展示、そのほか関連企画を行いました。

当館ではこれまでにアイヌの着物や木彫りの人形など、館蔵品を数点紹介したことは幾度かあったものの、アイヌについて本格的に取り上げた展覧会は初めてのことでした。そのため、2022年3月に当時は東京八重洲にあったアイヌ文化交流センターへの訪問を最初として、各地の展覧会や常設している博物館、公益財団法人アイヌ民族文化財団の催すイベント等に足を運び、多くの方々にご教示いただきました。特に北海道のウポポイ（民族共生象徴空間）、北海道大学植物園・博物館、萱野茂二風谷アイヌ資料館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館は、歴史・文化などすべてにおいて質・量ともに豊かな展示でした。また、ウポポイと二風谷コタンでスタッフや工芸作家の方々にお話が聞けたこと、北海道大学の北方民族資料室でのイオマンテの映像や資料、北方民族植物標本園でアイヌに関する植物を拝見できたことは貴重な体験でした。

こうして学んだ知見を展覧会内容に反映できないかと思い悩みましたが、まずは民芸館の使命として、柳や芹沢が蒐集した美の一級品を、モノの美しさを損なうことなくレイアウトし、来館の方々にはアイヌ工芸の美をダイレクトに感じていただきたく、第１民芸館を構成しました。とはいえ、かつてのアイヌの生活スタイルは現代と全く異なり、素材や用途など知らないことの多い作品ばかりであるため、第２民芸館の入り口にパネル解説を設けました。この解説は公益財団法人アイヌ民族文化財団に提供していただいたもので、作品理解の大きな一助となりました。

第１民芸館展示風景

展覧会を見るだけでなく、手仕事の体験を通して文化に興味を持ってもらえたらと、上記財団のアイヌ文化活動アドバイザー制度を利用して平田篤史氏を講師にお招きし、アイヌ文様の木彫コースター作りを開催しました。平田氏はアイヌの儀礼を執り行うほど造詣が深く、コースターを制作する過程において、縄文やアイヌについての講話もしていただきました。

記念講演会では、『もっと知りたいアイヌの美術』（東京美術）の著者で、北海道大学アイヌ・先住民研究センターのセンター長である山崎幸治氏をお招きしました。当初は、アイヌの歴史や文化、工芸について基礎的な部分をお話しいただく予定でしたが、本展において「アイヌ工藝文化展」（1941年・日本民藝館）や柳の著作についても紹介したことから、柳とアイヌの関わり、北海道における民藝運動について少し深掘りし、演題「アイヌ工芸ことはじめ」「アイヌと民藝」の二部構成としました。特に「アイヌと民藝」は、当時のアイヌに対する差別に異を唱え、信仰と美の関係についても書かれた柳の二つの論文「アイヌへの見方」「アイヌ人に送る書」を取り上げたもので、この論文に至るまでの背景、研究者たちの柳への批判を含めた評価を紹介し、アイヌと民藝との関係や課題について言及されました。

本展では過去に作られた美しい作品を存分に紹介していますが、それでは、現在はどういうものが作られているのか、また、どういった人が作っているのか、こうしたことも含めて伝えられる展覧会は可能か、これは私が特に大切にしていた部分です。この点について、今回株式会社テクラにご協力いただき、アイヌの工芸品や民具などの委託販売を通して形にすることができました。販売品が並ぶ一角には、木彫師である髙野繁廣氏と岡本朋也氏師弟を紹介する暖かみのあるポップが設置され、展示品にあるような作品ばかりだけでなく、漆器や熊の人形など、作家が作りたいと願い表現した作品もありました。また、岡本氏にはテクラ代表の宮入氏と共に当館へお越しいただき、展覧会をご案内しました。その際に、良いものは何度見ても良い、次はこういうものを作りたいとお話を伺い、彼の中に新たな創造の始まりを見て、そういう場面に立ち会う機会を得たことを、本当に有難く幸せに思いました。

講演会だけでなく資料についてもご教示いただいた山崎先生はじめ、アイヌ民族文化財団、日本民藝館、静岡市立芹沢銈介美術館、テクラの皆様、本当に多くの方々に支えられた展覧会でした。改めて深くお礼申し上げます。

（岩間千秋）

写真提供：テクラ

民芸館と本多記念民芸の森の1年を振り返って

間もなく令和６年度が幕を閉じようとしています。豊田市の民芸館施設を舞台にした今年度の主要なトピックスを４つ挙げてこの１年を振り返ります。

○ 新しい施設管理運営体制へ

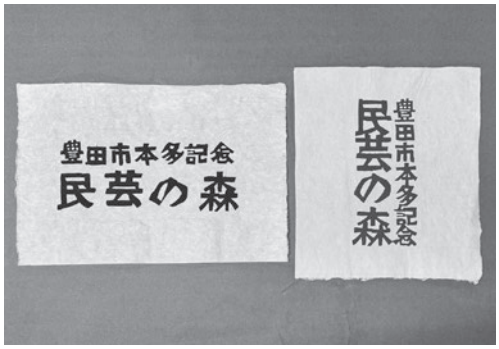
令和６年度は民芸館と本多記念民芸の森にとって新たな船出の年でした。今年度より両施設の管理運営業務の一部について指定管理者制度を導入したのです。学芸業務を除く施設全般の管理と講座等の運営を民間事業者に委ねることで業務のブラッシュアップを図りました。これは多様化する来館者ニーズに効率的に対応するとともに、専門的な学芸業務にも重点を置くことができる組織体制にすることが目的でした。こうした管理運営形態の変革は、民芸館施設のミュージアム機能を強化するうえで大きな一歩になったと実感しています。

○ ３館共通年間パスポート発行

令和６年４月、新たに豊田市博物館がオープンしたことに伴い、美術館と民芸館をあわせた３館がミュージアム施設として様々な活動を展開していく３館連携事業がスタートしました。そのひとつが３館共通年間パスポートの発行です。このパスポートを購入すれば各館主催の展覧会を１年間無料でご覧いただけるほか、様々な特典を受けることができます。美術館、博物館、民芸館で開催される展覧会を気軽に何度でもご覧いただけるこのお得なパスポートは、各館窓口にて、価格１枚（１名様）6,000円で購入できます。

＊民芸館単館の年間パスポート（1,500円）も販売しております。
詳しくは第３民芸館の窓口にてお問い合わせください。

○ 本多記念民芸の森のロゴの作成



「ロゴ」とは図案化された文字や文字列のこと。組織名や商号などを表示する際にそのイメージや魅力を表現するものとして使用されています。（ちなみに豊田市民芸館のロゴは染色家・柚木沙弥郎によるものです。）2016年にオープンした豊田市本多記念民芸の森は、これまで決まったロゴがなかったため、このたび染色家の山内武志氏にロゴの制作を依頼しました。山内氏は昭和13年静岡県浜松市生まれ。師である染色家・芹沢銈介のもとで長年制作に従事され、現在は浜松市の工房で精力的に仕事に取り組まれています。山内氏の手による型染めで制作されたこのロゴは、将来にわたってこの施設のシンボルとして末永く使用していきます。

○ 新調された大型展示ケース

第２民芸館で35年間使用してきた移動式の展示ケース。老朽化による破損等が著しいため、今年度新調することになりました。新しい大型の展示ケースは、岡山県倉敷市に工房を構える「松本家具研究所」に製作を依頼し、無垢材を用いて拭き漆仕上げを施した仕様で４台納入していただきました。木造の展示室と美しく調和し、展示品である民芸品を際立たせてくれるこの木製の展示ケースは、今後、この民芸館の展示活動で十二分に活かされていくことでしょう。

（都筑正敏）

本多記念民芸の森から

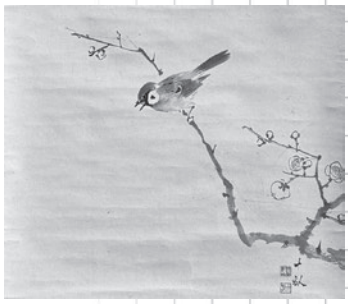
2025年度 前期　イベント・体験講座予定

○森の本多コレクション展「冬ナクバ 春ナキニ　－春・初夏を感じる本多静雄の蒐集品」

４月５日（土）～６月15日（日）

豊田市名誉市民で実業家、日本有数の古陶磁研究家として知られる故本多静雄が蒐集し豊田市に寄贈した資料（本多コレクション）の中から、春・初夏をテーマにした資料を中心に紹介します。

※「冬ナクバ 春ナキニ」は思想家・柳宗悦の言葉。冬の厳しい寒さを乗り越えると春がやってくるように、辛いことに耐えなければ、よいことも訪れないという意味です。



梅雀　荒木十畝

○初夏、森の手ざわり2025

５月下旬頃（予定）

舞台での演奏や展示、出店などを行い、地域住民の交流や憩いの場を創出します。

○森のアート展Vol.23

７月上旬 ～９月上旬（予定）

手仕事の素晴らしさを感じ、新たな発見や交流、創造の場となるよう芸術家等の作品を森の屋内外に展示する「森のアート展」を実施します。

○体験講座「ガラス風鈴に貼り絵をしよう」

７月中旬～８月下旬　※ なくなり次第終了

透明なガラス風鈴に小原和紙の色紙を使って絵付けをします。

世界で一つだけの風鈴を作成しませんか。

2024年度 後期　イベントのふりかえり

○森のアート展Vol.21「ゆきて たずねる こえ 植村宏木展」７月16日（火）～９月28日（土）

植村宏木氏（1990年北海道生まれ）は、いわゆる実用のための「工芸」ではない地平から立ち上がる独自の表現を探っている作家です。

ガラスを表現の主体としながら、時間や記憶の積み重なりによって生まれてくる、「場所」や「モノ」がもつ気配をすくい取るような作品を手がけています。

本展では、民芸の森の屋内外の空間に、ガラスや陶などを素材に用いた12点の作品を展示。美術と工芸それぞれの領域を横断する新たなビジョンを提示しました。

○民芸の森 観月会2024　10月19日（土）来場者：約550人

昨年に引き続きNPO法人民芸の森倶楽部が企画運営をして行いました。

時折雨の降るあいにくの天気でしたが、杜若高校や近隣の市民団体などによる舞台演奏、猿投台中学校美術部の作品や絞り染めの展示、参加型の俳句コーナーや森の市、お抹茶コーナーに加え、五平餅などを始めとした飲食店の出店を行いました。

○森のアート展Vol.22「揺れ動く輪郭―動的平衡　神尾和直展」１月11日（土）～３月23日（日）

愛知県を拠点に活動する染色家・神尾和直氏（1989年岡崎市生まれ）。彼は人間の手だけが生み出せる絞りと染めの揺らぎ、不定形で揺れ動く輪郭、ものづくりにおける作り手と使い手の循環などを探究しつつ、どこか生物を連想させるモチーフ柄を布に散りばめて作品を制作します。

自作のみならず、作家がワークショップの参加者とともに力を合わせて製作したタペストリーを展示するなど、新しい視点から生み出された絞り染めの世界を展開しました。

令和7年度（4月～令和8年3月）展覧会のご案内（観覧料 有料）

「おいしい民窯―食のうつわ」 第1・2民芸館

令和7年1月11日（土）～5月25日（日）

「民窯（みんよう）」とは、日々の生活のなかで使う器や道具などを焼く窯、またはそのやきもの自体を指します。民窯という言葉は「民藝」という言葉とともに昭和初期から広く使われるようになりました。今回の展示では、愛知県の瀬戸焼や常滑焼はもちろん、北は岩手県の久慈焼、南は沖縄県の壺屋焼まで、職人の手仕事による食にまつわるやきものを紹介します。

「海のシルクロード 絣の道」第1・2民芸館

令和7年6月28日（土）～9月21日（日）

絣は模様となる部分を、糸の段階で括って防染し、あらかじめ染め分けてから織り上げた布であり、その装飾技法です。この防染した部分がかすれた風合いに織りあがることから絣と呼ばれます。それはインドを源流とし、シルクロードを経てヨーロッパ・中国まで及び、また、インドから南に下ってインドネシア・フィリピンなどを経て沖縄へ伝わり、そこで技術が花開いたのち、日本各地に普及しました。この日本への伝播は航路によるもので、まさに「海のシルクロード」といえるでしょう。今回は個人コレクターの蒐集品より、インド源流の絣がどのように伝播していったのか、その「絣の道」とともに世界の絣作品を紹介します。

幾何文経絹緯木綿経絣チャパン
トルキスタン（アフガニスタン）

「鈴木繁男　手と眼の創作」 第1・2民芸館

令和7年10月11日（土）―令和8年1月 12日（月・祝）

柳宗悦の唯一の内弟子である鈴木繁男（1914-2003）は、柳にその非凡な才能を認められて1935年に入門し、工芸や直観について厳しく教育されました。鈴木による仕事は漆絵、陶磁器、装幀など多岐にわたりますが、特筆すべきは雑誌『工藝』の装幀でしょう。一つひとつ和紙に漆で描かれた表紙は、多くの民藝の関係者や読者を驚かせました。

本展は日本民藝館（東京）で開催された「鈴木繁男展－手と眼の創作」の巡回展として開催します。これまで認知されることの少なかった工芸家・鈴木繁男の多彩な仕事とその蒐集品を紹介します。

『工藝』第100号 鈴木繁男装幀
1939年 日本民藝館蔵

ふたつの特集展示：「本多静雄と杉本健吉」「館蔵品による 芹沢銈介」第1・2民芸館

令和8年2月 上旬 ―5月 下旬

豊田市名誉市民で実業家、日本有数の古陶磁研究家として知られる本多静雄（1898-1999）と名古屋市出身の画家・杉本健吉（1905-2004）。本展では、杉本の絵画をはじめ、杉本が手掛けた本多主催のお茶会や創作狂言に係る作品など、二人の深い交流と文化活動に焦点をあてた展示をおこないます。

また同時開催として、日本を代表する染色家・芹沢銈介（1895-1984）の作品を、当館所蔵品によって特集展示します。

杉本健吉 社頭蓮池 1979年 豊田市蔵

民芸館ギャラリー（第3民芸館）のご案内（観覧料 無料）

令和7年5月18日（日）まで		令和6年度民芸館講座作品展
6月28日（土）～	9月21日（日）	藤本巧写真紀行「絣の道」インド、インドネシア、そして沖縄
10月7日（火）～	10月15日（水）	ペーパーアート展（仮）
10月24日（金）～	10月26日（日）	国際芸術祭「あいち2025」巡回展示「ポップ・アップ！」
11月1日（土）～	11月30日（日）	公募期間
12月6日（土）～	令和8年2月1日（日）	郷土玩具展　干支と午
2月17日（火）～	5月17日（日）	令和7年度民芸館講座作品展

この展示案内は、年間計画のため今後日程・内容等が変更となることがあります。

民芸館からのお知らせ

① 平戸橋桜まつり2025を開催

４月５日（土）雨天決行　午前10時～午後3時

・民芸館を含む平戸橋公園会場
　野外ステージや食品バザー、クラフトショップ、体験講座、写生大会、スタンプラリー等

・本多記念民芸の森会場
　森の市（食品、クラフト販売）、舞台上演、狂言舞台鏡板公開、「貼り絵で鯉のぼりを作ろう」無料体験

② 新緑ウィーク　絞り染めこいのぼりの展示と３館合同スタンプラリー

新緑ウィーク期間中【４/19（土）～５/６（火）】に、豊田市民芸館第３民芸館前と本多記念民芸の森で、絞り染めこいのぼりを展示します。また、この期間には3館合同スタンプラリー〔民芸館・民芸の森・いこいの広場〕も開催。平戸橋一帯の新緑と初夏のさわやかな風の中でのウオーキングをお楽しみください。

スタンプ設置場所：民芸館（第３民芸館）・民芸の森（田舎家）・平戸橋いこいの広場（受付横）

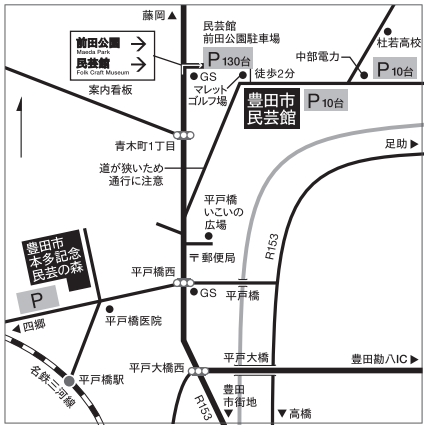
時間：午前９時30分～午後４時30分　参加無料

ウオーキングマップに３施設のスタンプを押してお持ちいただいた方には、民芸館または民芸の森のオリジナルグッズをプレゼントします。

③ 新しいオリジナルグッズのご案内

豊田市民芸館の新しいオリジナルグッズが続々と完成しつつあります。館蔵品の円空仏や筒描などをモチーフにした民芸館限定のミュージアムグッズです。完成次第、順次第３民芸館にて販売していきます。

1. 円空仏缶バッジ５種（大サイズ：直径38㎜丸形、小サイズ：直径32㎜丸形）大：200円　小：150円
2. 円空仏マスキングテープ（15㎜幅）400円
3. 筒描マスキングテープ（25㎜幅）500円
4. 円空仏一筆箋（100枚つづり）400円
5. 円空仏クリアファイル（A4サイズ）300円
6. 収蔵品クリアファイル（A4サイズ）300円



お問合せ　豊田市民芸館

〒470－0331　愛知県豊田市平戸橋町波岩86－100
TEL 0565－45－4039　FAX 0565－46－2588

休 館 日　月曜日（祝日の場合は開館）
開館時間　午前９時30分～午後５時
入 館 料　無料（有料展あり）
https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/

豊田市本多記念民芸の森
〒470-0331
豊田市平戸橋町石平60-1
TEL 0565-46-0001